鉛筆

えんぴつ

鉛筆の硬度の種類

概要

鉛筆は、主原料の黒煙と粘土を混合し、細い棒状に焼き固めた芯を、木材の軸に納めた描画材です。日常の筆記をはじめ、デッサンやクロッキー、製図など多岐に渡り利用されています

鉛筆の特徴としては、やや金属的な光沢を含む黒色の描線で、色材が比較的硬質なため、筆触は滑るようになめらかで､筆圧の加減による濃淡の調節が容易です。また、様々な種類の芯の硬さがあり、描線の濃度に大きく影響します。鉛筆の芯は､黒鉛と粘土に水を加えながら混合･粉砕し、細い棒状に成型して乾燥させた後、約 1000 度で焼成し、熱した油を浸透させて作られています。その際の黒鉛と粘土の混合量により芯の硬度が決まり、アルファベットと数字で硬度を分類しています。H は｢Hard｣の頭文字で、芯が硬く淡い色味が特徴です。H ～ 10H と数字が大きくなると硬度が増します。B「Black」は芯が柔らかく濃い色味を持ち、B ～ 10B と数字が大きくなると芯は柔らかくなります。HB は H と B の中間の硬度や色味を持ち、F「Firm（丈夫な)」は、HB と B の中間の質を持ちます。他にコンテに近い色味を持つ EB「Extra Black」や EE「Extra Extra black」があります。

デッサンで鉛筆を使用する際は、先端を筆記時に用いる場合よりも、芯部と木部を大きく削り出して鋭利にします。これはシャープな線描ができるとともに、鉛筆を寝かせ、芯の側面部により、幅のある塗りを容易にするためです。描き始めは大きなストロークで肩を支点に腕を動かす意識で描き、完成に近づくほど、肘や手首へと支点を移して描き込んでいきます。鉛筆による描画は、基本的には無数の「線」の積み重ねにより、濃淡や調子を作っていきますが、消しゴムや練り消しゴムなどの併用で、より繊細で複雑な描画効果を得ることができます。

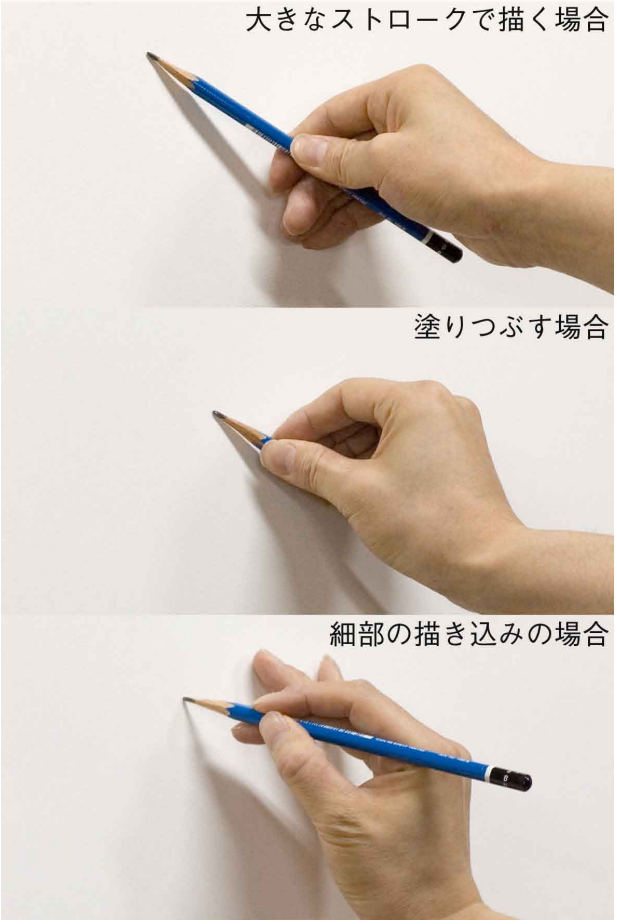
古代より金、銀、銅、鉛などを用いた描画材（メタルポイント）は利用されていましたが、1564 年にイギリスのポロウデール鉱山で黒鉛が発見され、1795 年にフランス人のニコラ・ジャック・コンテにより、今日の鉛筆製法の基礎が発明されたことで、扱いやすく変色の少ない描画材として各国へ広まりました。日本では江戸初期

Copyright © 2007-2009 Musashino Art University. All Rights Reserved.

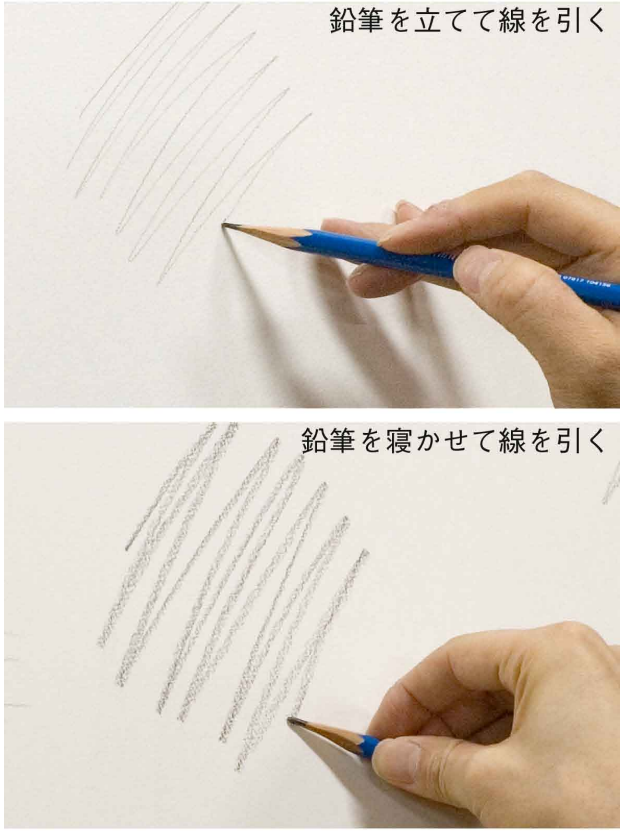
に徳川家康への献上物として伝わり、「木筆」と呼ばれ、国内では1889年に生産されるようになりました。
鉛筆には色材を支持体に定着させる成分が含まれていないため、描画部分の色材が取れ易い状態になります。完成後はフィクサチーフでの定着をお奨めします。
鉛筆は、画材店や文具店で購入できます。

鉛筆の先端

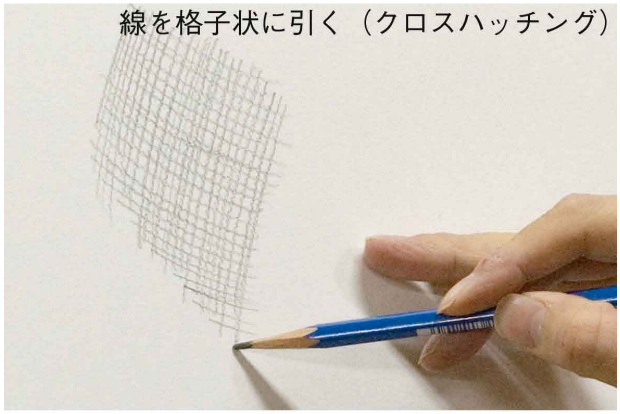
鉛筆の持ち方

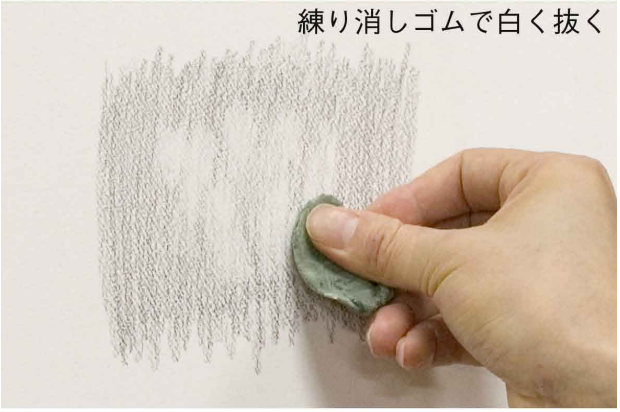


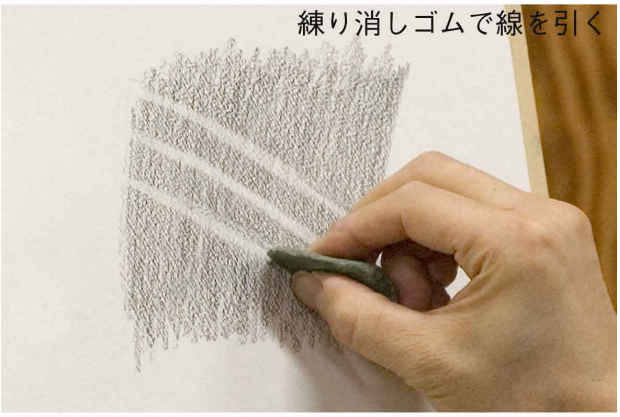
鉛筆の描画例（サンフラワーM画）

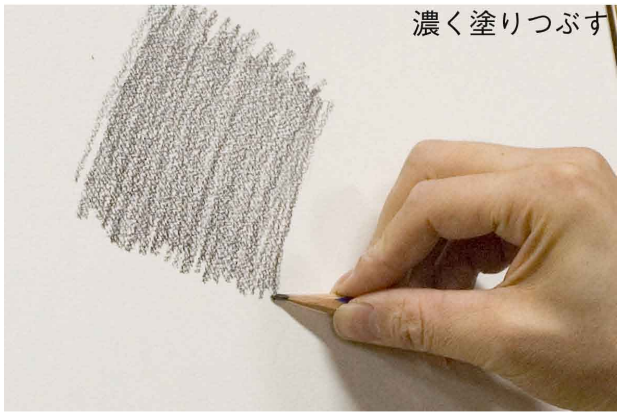


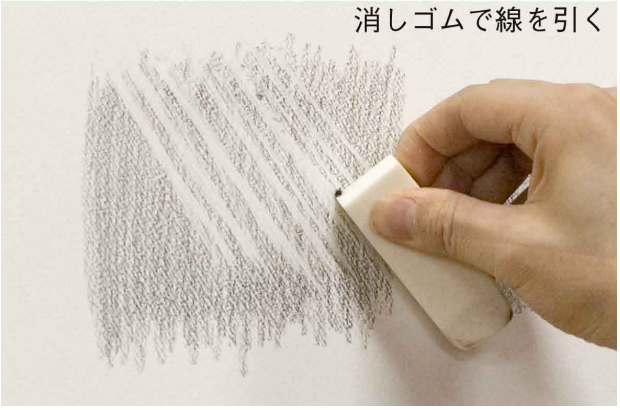
Copyright © 2007-2009 Musashino Art University. All Rights Reserved.





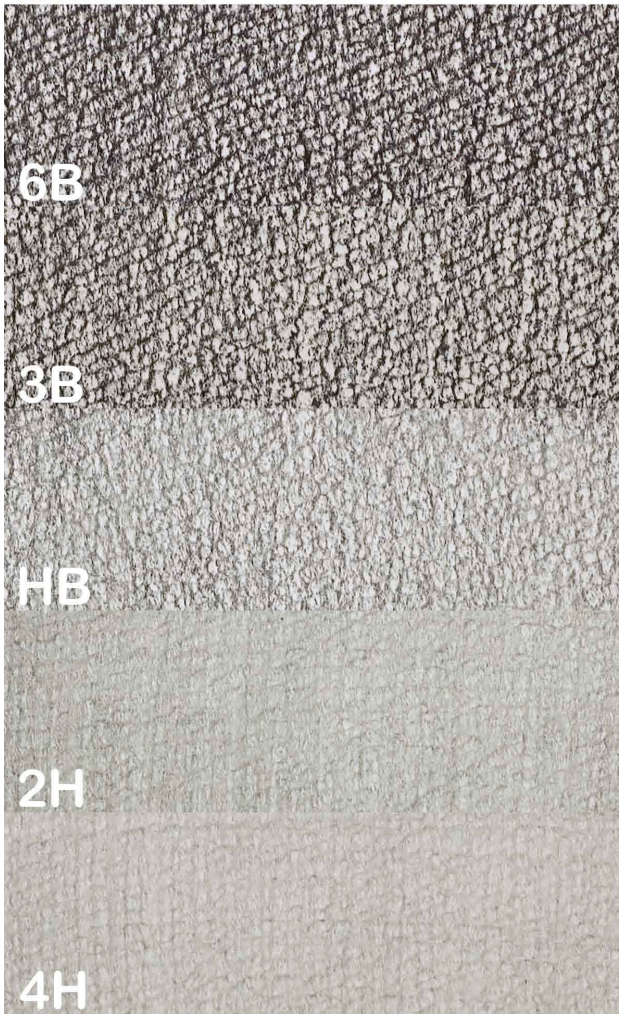




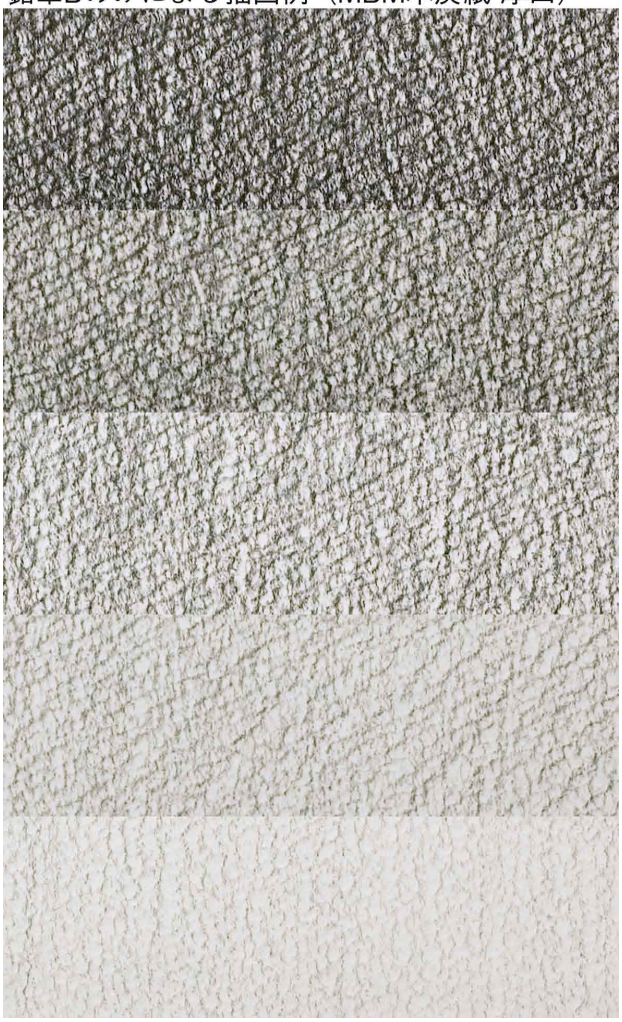


Copyright © 2007-2009 Musashino Art University. All Rights Reserved.

硬度別描画例（MBM木炭紙 厚口）



鉛筆Bのみによる描画例（MBM木炭紙 厚口）



Copyright © 2007-2009 Musashino Art University. All Rights Reserved.